

# 子どもの性別が親の政策支持・価値観に与える影響

湯川志保<sup>a</sup>

## 要約

本研究は、東京大学社会科学研究所が実施する「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y)」と「東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M)」<sup>b</sup>の 2007 年から 2013 年のデータを用いて、子どもの性別が親の政策支持や価値観に与える影響について分析を行った。具体的には、親が誕生した子どもに有利になるような行動をとるのかという点に焦点をあて、子どもの性別が親の政策支持や価値観に与える影響を分析した。分析の主な結果は以下のとおりである。息子しかもたない親は、学歴の獲得や雇用政策といった将来の職や雇用に関わる項目を重要視することが確認された。一方、全体の結果からは、娘しかいない親は両方の性別を持つ親に比べて、女性の自立を支持するような価値観になることが確認された。

JEL 分類番号： J13, J16

キーワード： 子どもの性別, 親の政策支持, 親の価値観

## 1. イントロダクション

本研究は、子どもの性別が親の支持する政策や価値観に与える影響を分析する。これまでの研究では、子どもの誕生や誕生した子どもの性別によって、親の労働供給や時間配分、喫煙や飲酒、政党支持に影響を与えることが観察されている (例えば、Lundberg and Rose 2002, Oswald and Powdthavee 2009 など)。これらの研究の背景には、子どもの性別に関する選好や子どもの性別の違いによって育児にかかる大変さが異なることによるストレスの大きさの違い、誕生した子どもにとって有利になるような行動をとるなどが存在する。本研究では、特に、誕生した子どもにとって有利になるように親が行動するのかや、価値観に変化が観察されるのかに注目して分析を行った。

---

<sup>a</sup> 帝京大学経済学部講師 s\_yukawa@main.teikyo-u.ac.jp 本研究は、科学研究助成事業若手研究 B (課題番号 15K17056) の助成を受けました。

<sup>b</sup> 本分析をおこなうにあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y) wave1-7, 2007-2013 と東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M) wave1-7, 2007-2013 (東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト)」の個票データの提供を受けました。記して感謝致します。

## 2. 先行研究

前述したとおり、これまでの研究では、子どもの誕生や子どもの性別は親の行動に影響を与えることが確認されている。子どもの誕生と男性の労働成果に注目した研究として、Lundberg and Rose(2002)と Choi et.al(2008)、Yukawa(2015)が存在する。これらの研究は、パネルデータを用いて、子どもの誕生や子どもの性別が男性の労働供給や賃金に与える影響を分析している。分析の結果から、子どもの誕生はどの国でも男性の労働時間や賃金をおおむね増加させることが確認されている。一方、子どもの性別が与える影響については、国による違いが観察されている。アメリカとドイツでは、息子の方が娘の誕生よりも男性の労働時間や賃金に与える影響は大きいが、日本では、子どもの性別により違いによる男性の労働成果に与える影響の違いは小さいという結果を得ている<sup>e</sup>。これらの研究は、子どもの性別と親の労働時間に焦点をあてているが、親の子どもへの時間的投資に注目した研究として、Mammen(2011)が存在する。Mammen(2011)では、American Time Use Survey を用いて、子どもの性別によって子どもと過ごす時間に違いが観察されるかを分析した結果、息子の方が娘よりも多くの時間を親から与えてもらっていることが確認された。さらに、子どもの性別は親の時間に影響を与えるだけでなく、親の行動や政治選考にも影響を与えている。Powdthavee et.al(2009)は、子どもの性別と飲酒や喫煙、薬物使用との関係性を分析し、息子の誕生の方が娘の誕生に比べて、これらの行為を促進させることが確認された。また、Oswald and Powdthavee(2009)は、British Household Panel Survey を用いて子どもの性別が親の政党支持に与える影響を分析し、娘を持つ親ほど左翼を支持する傾向にあることを示した。このように子どもの誕生や性別は、親の時間配分や政治に関する意思決定、飲酒や喫煙行動などに影響を与えることが確認されていることから、本研究で分析を行う政策の支持や価値観に影響を与える可能性がある。

## 3. データ・推定モデル

分析に使用するデータは、東京大学社会科学研究所が実施する「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y)」と「東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M)」の 2007 年から 2013 年までのデータである。東大社研・若年パネルは、日本に住む 20～34 歳の男女を、東大社研・壮年パネル調査は、日本に住む 35 歳～40 歳の男女を追跡したパネル調査で、本人や配偶者の属性、子どもの有無や性別、政策や価値観に関する考えなどが含まれたデータであり、本研究の分析を行うのに適したデータである。本研究では、この 2 つのデータを結合させたものを分析に用いる。

被説明変数として用いる政策の支持に関する変数と価値観に関する変数は表 1 のとおり

---

<sup>e</sup> ドイツについては、高学歴層の男性にのみ観察される。

である。①から⑩までの被説明変数については、「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と回答したら 1、それ以外を 0 とするダミー変数である。また、⑪から⑯は、「賛成」または「どちらかと言えば賛成」と回答したら 1、それ以外を 0 とするダミー変数である。注目する説明変数は、子どもの性別ダミーである。具体的には、娘のみいる場合は 1、それ以外を 0 とする「娘しかいないダミー」と、息子のみいる場合は 1、それ以外を 0 とする「息子しかいないダミー」である（リファレンスグループは、娘も息子もいる親）。コントロール変数として、本人の年齢、本人の就業状態、本人の学歴、健康状態、世帯所得、配偶者の就業状態、配偶者の学歴を加えた。また、子どもの性別と親の政策支持や価値観に与える影響については、ロジットモデルで分析を行う。推定式は以下のとおりである。

$$y_i = \begin{cases} y_i^* & \text{if } y_i^* > 0 \\ 0 & \text{if } y_i^* \leq 0 \end{cases} \quad y^* = \beta_1 \text{Onlygirl}_{it} + \beta_2 \text{Onlyboy}_{it} + \gamma' X_{it} + u_{it}$$

#### 4. 分析結果

推定結果は表 2 のとおりである。まず、全体の分析結果をみていく。娘しかいない親については、性別役割意識に関する項目（⑦と⑧）と結婚生活に関する項目（⑩）、社会福祉政策に関する項目について有意な影響を与えていた。⑦と⑧の結果をあわせると、娘しかいない親は、女性の自立を支持するような価値観になることが確認された。また、結婚については、不幸せな結婚を続けるくらいならば、離婚する方が良いという考えをもっていることが確認された。一方、社会福祉の政策に関しては、財政が苦しくなっても充実すべきという考えを支持しないことが確認された。息子しかいない親については、社会的地位の獲得条件に関する項目（⑤）と性別役割意識（⑦）、結婚に関する項目（⑨）、雇用政策に関する項目（⑭）について有意な影響を与えていた。特に注目したいのは⑭である。息子しかいない親は、どちらの性別の子どももいる親に比べて、公共事業による地方の雇用確保が重要であると考えることが確認できた。これは、主に家計で稼ぎ手となるのは男性であるため、このような政策を支持する傾向にあることが示唆される。

次に男親の結果をみていく。男親の結果からは、子どもの性別が、②と⑥、⑦、⑧の政策や価値観に有意な影響を与えていることが示された。どちらの性別の子どもにもつ人の方が片方の性別しかいない男親よりも性別役割意識が強い傾向（⑦）にあることが示唆される。また、⑦と⑧の結果から、息子しかいない男親は、娘と息子をもつ男親よりも母親が外で働くことに否定的な一方、女性の自立には仕事を持つべきという考えを持つことが示された。これは、息子しかいない親が、労働市場での息子の活躍のためには、結婚相手である女性に子育てに専念してもらうのが望ましいと考える一方、共働きでないと生活が苦しくなる現状を考え、共働きをしてくれる女性と結婚してほしいと考える複雑な心境を

反映している可能性がある。最後に女親の結果をみていく。女親の結果からは、子どもの性別が③と⑤、⑨、⑭、⑮の政策や価値観に関する項目に影響を与えていることが示された。息子しかいない女親は、両方の性別をもつ女親に比べて、学歴の重要性（③）や公共事業による雇用確保が重要であると考えることが確認された。これは、先ほども全体の結果で述べたとおり、主に家計での稼ぎ手となるのは男性であるため、息子しか持たない女親は両方の性別の子どもをもつ親よりもより強くこのような将来の職や雇用に関わる項目を重要視することが考えられる。一方、娘しか持たない女親は両方の性別の子どもを持つ女親に比べて、一般的に結婚している方がしていない人よりも幸せであると感じる傾向にあることや、財政が苦しくなっても充実するべきという考えを支持しないことが確認された。

## 5. 結論

これまでの先行研究から、子どもの性別は親の労働成果や時間配分、親の政治に関する選好、親の飲酒や喫煙などの行動に影響を与えることが確認されている。本研究では、誕生した子どもにとって有利になるような行動をとるのかという点に焦点をあて、子どもの性別の違いが、親の政策の支持や価値観に与える影響について分析を行った。分析の結果、いくつかの項目については、子どもの性別が親の政策支持や価値観に影響を与えていることが確認された。主な結果は以下のとおりである。息子しかもたない親は、学歴の獲得や雇用政策といった将来の職や雇用に関わる項目を重要視することが確認された。一方、全体の結果からは、娘しかいない親は両方の性別を持つ親に比べて、女性の自立を支持するような価値観になることが確認された。

### 表 1 政策と価値観に関する変数

- 
- ①所得格差が大きいことは、日本の繁栄に必要な
  - ②日本の所得の格差は大きすぎる
  - ③どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう
  - ④仕事や事業でいったん失敗すると、人生のやり直しがしにくい
  - ⑤地位や富を得るためには、裕福な家庭の出身であることが重要だ
  - ⑥男性の仕事は収入を得ること、女性の仕事や家庭と家族の面倒をみることだ
  - ⑦母親が外で働くと、小学校に通う前の子どもはつらい思いをしやすい
  - ⑧女性が自立するためには、仕事を持つのが一番よい
  - ⑨一般的に言って、結婚している人のほうが、結婚していない人より幸せだ
  - ⑩不幸な結婚生活を続けるくらいなら、離婚した方がよい
  - ⑪日本の防衛力はもっと強化するべきだ
  - ⑫日米安保体制は現在よりもっと強化するべきだ
  - ⑬収入の多い人と少ない人の所得格差を縮めるのは政府の責任だ
  - ⑭公共事業による地方の雇用確保は必要だ
  - ⑮社会福祉は財政が苦しくても極力充実するべきだ
  - ⑯お年寄りや心身の不自由な人は別として、すべての人は社会福祉をあてにしないで生活しなければならない
-

**表 2 子どもの性別が親の政策支持・価値観に与える影響**

表1の対応番号 (政策・価値観)	⑤		⑦		⑧		⑨		⑩		⑭		⑮	
全体	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果
娘しかいない	0.051 (0.070)	0.011 (0.015)	-0.148** (0.066)	-0.036** (0.016)	0.146** (0.065)	0.036** (0.016)	0.070 (0.075)	0.013 (0.014)	0.146** (0.068)	0.033** (0.015)	-0.017 (0.046)	-0.004 (0.011)	-0.086* (0.048)	-0.019* (0.011)
息子しかいない	0.147** (0.070)	0.031** (0.015)	-0.111* (0.067)	-0.027* (0.016)	0.061 (0.066)	0.015 (0.016)	0.279*** (0.074)	0.053*** (0.015)	0.063 (0.069)	0.014 (0.015)	0.123** (0.053)	0.031** (0.013)	-0.021 (0.055)	-0.005 (0.012)
表1の対応番号 (政策・価値観)	②		⑥		⑦		⑧							
男性	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果						
娘しかいない	-0.012 (0.076)	-0.003 (0.019)	-0.234** (0.101)	-0.057** (0.024)	0.161 (0.100)	0.040 (0.025)	-0.085 (0.106)	-0.019 (0.024)						
息子しかいない	-0.210** (0.083)	-0.052** (0.020)	-0.290*** (0.101)	-0.070*** (0.024)	0.194** (0.099)	0.048** (0.025)	0.392*** (0.101)	0.091*** (0.024)						
表1の対応番号 (政策・価値観)	③		⑤		⑨		⑭		⑮					
女性	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果	係数	限界効果				
娘しかいない	-0.054 (0.067)	-0.011 (0.013)	0.072 (0.094)	0.015 (0.019)	0.226** (0.107)	0.034** (0.017)	-0.097 (0.060)	-0.024 (0.015)	-0.145** (0.063)	-0.032** (0.014)				
息子しかいない	0.303*** (0.083)	0.058*** (0.015)	0.234** (0.096)	0.048** (0.020)	0.149 (0.113)	0.022 (0.018)	0.292*** (0.071)	0.072*** (0.017)	0.068 (0.076)	0.015 (0.016)				

有意水準 \*\*\*1% \*\*5% \*10%

**引用文献**

Choi, H.J., Joesch, J. and S. Lundberg, 2008. Sons, daughters, wives, and the labour market outcomes of West German men. *Labour Economics* 15(5), 795-811.

Lundberg, S. and E. Rose, 2002. The effects of sons and daughters on men's labor supply and wages. *The Review of Economics and Statistics* 84(2), 251-268.

Mammen, K 2011. Fathers' time investments in children: do sons get more?. *Journal of Population Economics* 24(3), 839-871.

Nattavudh, P., S. Wu and A. Oswald The Effects of Daughters on Health Choices and Risk Behaviour. *Discussion Papers in Economics*(The University of York )

Oswald, A.J., and N. Powdthavee. 2010. Daughters and Left-Wing Voting. *Review of Economics and Statistics* 92 (2), 213-227.

Yukawa, S., 2015. Effects of Fatherhood on Male Wage and Labor Supply in Japan. *The B.E. Journal of Economic Analysis & Policy* 15(2), 437-474.